

沈黙の世界史



英雄伝説を掘る

沈黙の世界史 ③
ギリシア
英雄伝説を掘る

村田数之亮著



新潮社

むらた かずの すけ
村田数之亮

1900（明治33年）舞鶴に生まれる。

1926年，東京大学西洋史学科卒業。

現在，阪大名誉教授甲南大学教授。

専攻；西洋古典考古学。

えいゆうでんせつ ほ
英雄伝説を掘る／ギリシア

沈黙の世界史 3

1969年11月25日 発行

1975年7月25日 5刷

定価／950円

著者／村田数之亮

発行者／佐藤亮一

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／大口製本株式会社

発行所／新潮社 振替 東京 4-808

〒162 東京都新宿区矢来町71

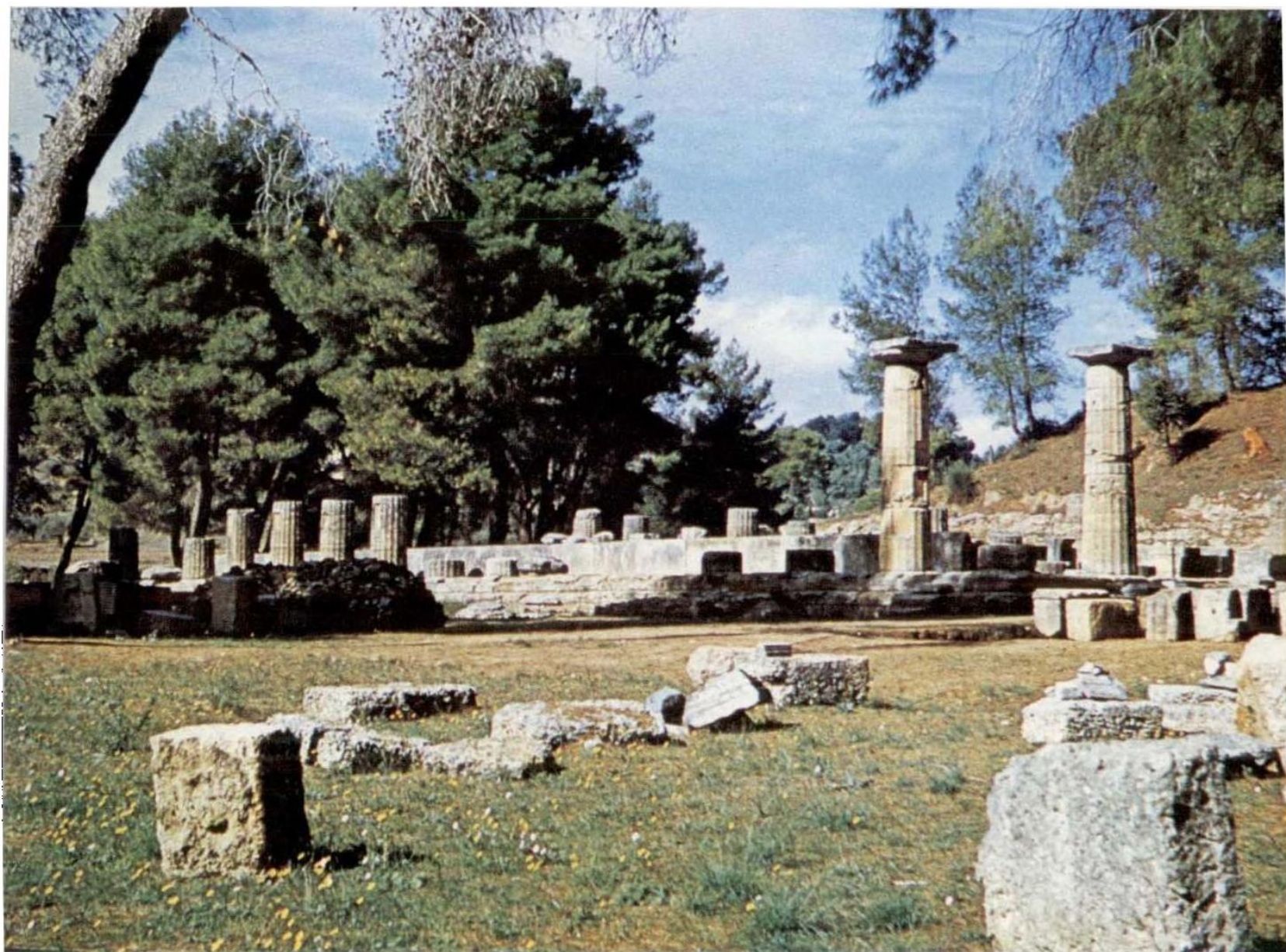
電話 (03) 266-5111 (業務)

(03) 266-5411 (編集)

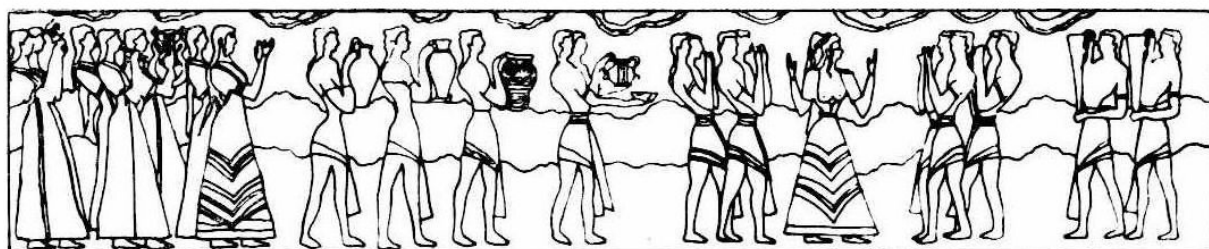
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付

下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kazunosuke Murata 1969, Printed in Japan.



オリンピア遺跡：ヘラ神殿 前600年頃



目次

はしがき

I 英雄の時代

トロヤ伝説とシュリーマン

シュリーマンとホメロス 伝説のトロヤ 鋏を入れる トロヤの

自然 夢を掘りあてる 新しい課題 シュリーマンの迷い デ

ルプフェルトの活躍 トロヤ遺跡の編年 トロヤ財宝の行方 謎

の第七市Aの決定 トロヤ文化圏

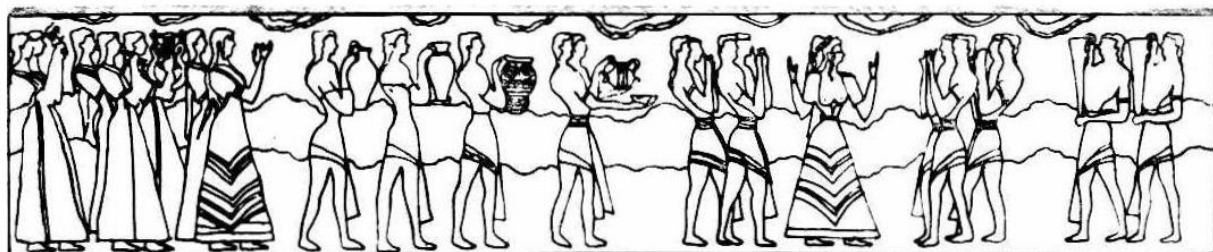
ミケネの英雄伝説と考古学

伝説のアトレウス王朝 黄金に富むミケネ ティリンスの城塞

古代への情熱 ミケネ城の全貌 穹窿墓 第二の円形墓地 オ

ルコメノス王国 ミニアス陶器とギリシア人の祖先 ピロスの発

見 ネストル王の宮殿 ミケネ世界の再建 ミケネ時代



Ⅱ 最初の海洋王国

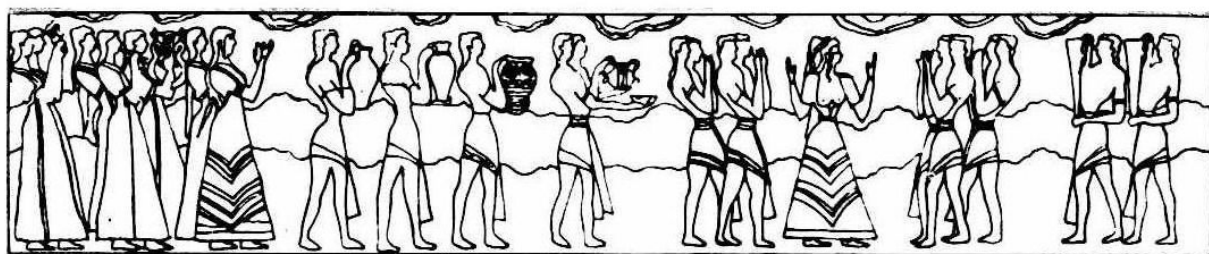
古代クレタ文明

クレタ島の玄関 伝説の島 迷宮の発見 クレタ考古学の先駆者たち
 アーサー・エヴァンズ クレタ発掘の黄金期 クノッソスの発掘
 ミノス王の宮殿 「ミノア文明」の諸時代 ファイストスへの道
 ファイストスの宮殿 アレクサンドロスとの再会 カマレスの洞窟
 ハギア・トリアダの離宮 第三の宮殿マリア クレタの小ボンペイ
 クレタ文明 オリエントの系譜 二つの悲歌 謎の文字 線文字Bの解読

Ⅲ ギリシアの神域

ゼウスの聖域オリンピア

文献と考古学 『ギリシア周遊記』 パウサニアスのオリンピア
 オリンピアの興亡 プロシア王とクルティウス ドイツ帝国の発掘
 新しい考古学の宝庫 新時代を荷なう者 シュリーマンとデルプフェルトとの出会い
 デルプフェルトのオリンピア発掘 ギリシアの土となった考古学者
 クンツェの発掘 オリンピア博物館



IV

ヘレニズム都市

壮大な城市ペルガモン

ペルガモン博物館 カール・フーマン 世界の七不思議 大祭壇
 の発掘 祭壇のフリーズ 第二、第三回の発掘 ペルガモン王国
 の興亡 ペルガモンの遺跡 ヘレニズムの時代精神 晩年のフー
 マン

河口に栄えた商業都市

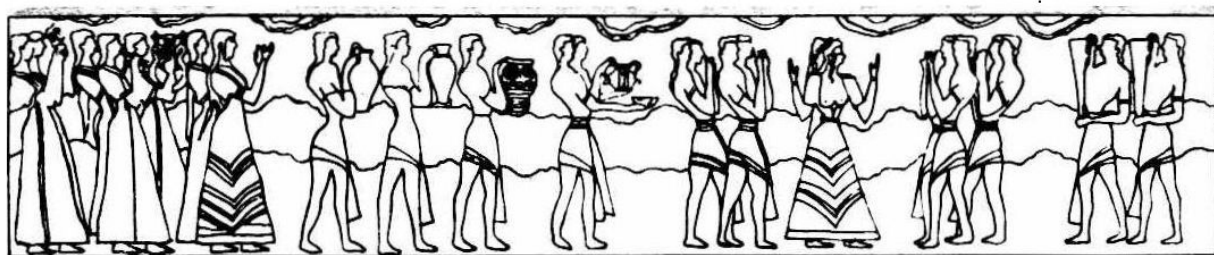
マイアンデルの河口地帯 ヴィーガントの遍歴 プリエネの発掘
 イオニアの誇りミレトス ミレトスの発掘 ミレトスの聖地ディデ

アポロンの神託所デルフォイ

デルフォイへの道 フランスの発掘はじまる 再生されるデルフォイ

アテネのアクロポリス

白玉の神殿 荒廃の丘 パルテノンの再建 カヴァディアスの発
 掘 ペラルギコン アテナ古神殿と旧パルテノンの発見 紀元前
 五世紀のアクロポリス



イマ ディディマの発掘 ペルガモン博物館の建設

付 録

索引

図版引用一覧

参考文献

年表

地図

ix vii vi i

写真提供 装幀 新 規矩男

ブ ラ ス

口絵 村田数之亮

英雄伝説を掘る

ギリシア

はしがき

「わたしがこの本を書いた動機は、学問上の野心からではない。むしろひとつの学問を考察の対象にしてみることだけが、私の意図するところであつたといつてよい。それも研究者や学者の仕事を、とくに彼らの内面的緊張や劇的な結びつきや人間的なつながりのなかで、描いてみることだつた」これはC・W・ツェーラムの『神・墓・学者』(中央公論社刊)の序文の一部分だが、私の「はしがき」はこの文章を繰返すことしかできない。私のこの書の意図もそれと少しも変らないからである。

いったい発掘において、何か珍しい物が出たか、ことに世界で最初の何かが発見されたか、ということは確かに重要であるだろう。しかし私がいま尊重したいのは、どのような予想(推定)をたて、どのような計画と方法とで発掘をおこない、またその発見物をどのように解釈したか、ということである。発掘の前提とその経過のなかに、学者の推理、学問が本来そなえるべき論理性を認めることができるし、また発見物の沈黙から雄弁をひきだすのは、類推と洞察力との働きによるであろう。このように私は発掘を見たいのである。それはことさらに考古学を物語的に記述するためではなく、むしろそれが発掘の理解だと考えるからである。

そうすると、当然に発掘には、それに従う人の才能ばかりでなく、その人の人間が現われているのに気づくだろう。発掘者の個性が、遺跡を掘り、物を見るときにも、反映しているのだ。私がとりあ

げたのは、すぐれた学者と著名な遺跡——それは彼らの働きによって再生されたものだが——についてであるが、彼らはその土地（あるいはある時代）にたいして、愛着と執念をもつて全身を献^{ささ}げている。その姿はまことに美しくすがすがしいと私は思うが、そのような執念と献身とはまた逆に彼の人となりに影響し、その養分となって、彼の精神的な変化と成長とをもたらしている。

結局、私はこの書を、発掘そのものとその前後の過程、それらにからみあう人格に引かれて書いていたのである。それはツェーラムのように「本書は考古学の成果、その英知と不屈に捧げる讃歌」であるといえる。この場合、「考古学」は「考古学者」におきかえても変りはない。事実、彼らのときどきの推断、当惑、決断、そして発掘条件にたいする奮闘といったものに筆が走った。

しかしこの書は学者の伝記であつてはならないし、またあまりに専門的にならぬようにも多少は注意した。それでところどころに私の筆の戯れで、余分な私記的なことを記したり、発見物または遺跡の復原の姿を書いたりしたが、それらはあまり退屈にならぬためよりも、広く古代文化、またギリシア的なものへの親近感を与えることができれば、と考えたからでもあつた。また学術的な推理や論断も少し簡略化しすぎたことを私は十分知っている。さらに真の学者たちにたいしては、彼らの労苦や心痛の深さにはふれること浅くて、相済まぬ次第だと思つてゐる。結局はまたツェーラムのように「こうして学者たちに『非学問的』とよばれるに違ひないような一冊の本ができあがつたわけだ」と書かざるをえない。しかしおそらく彼がそうであつたように、私も自分では「非学問的」だと述べたが、他の人からは「非学問的」だとはいわれたくないような心意気がないでもない。

なお一言つけ加えておきたい。この書でとりあげた学者たちは、それぞれの遺跡や時代についての代表者であり、つねに協力者や助言者がいたということである。彼らの名が出ることが少ないのは、

煩わしくなるからはぶいただけである。彼らの名はそれぞれの公式の発掘報告書にはもちろん記されている。そしてどの代表的な学者もひとつの学問の流れ、研究の伝統につながり、またそのなかにいる多くの同類のなかのひとりである。しかしこの書は、A・ミハエリスの『美術考古学発見史』のような研究史の系統を志してはいない。もっともこの卓抜した名著から教えられてはいるけれども、もっと重点的で、またより遺跡中心的で、また学者個人を抜きだしたものになった。

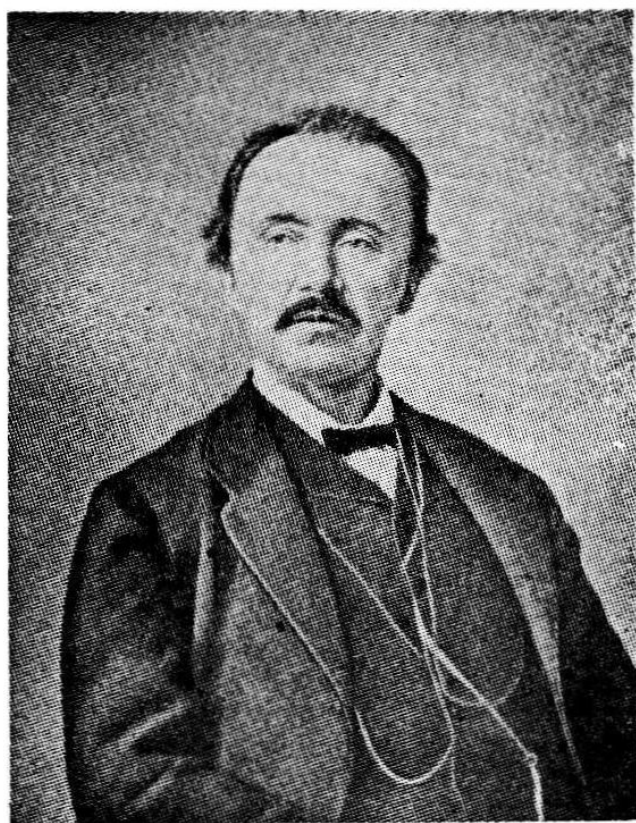
この叢書の企画は新潮社の発意であって、その強請に屈して私も筆をとったわけだが、いまようやくに書き終えて顧みると、以上のような感慨がわいてくる。そして頁数の制限から、何の理由もなしに触れなかったり、簡略にしか記さなかったデルフォイ、デロス、エレウシス、エピダウロス、コリント、またアテネのアゴラやケラメイコスなどについては、十年のちには、それらのために本書の第二部を書きたいと思うほど、私も得るところが多かった。

そしてまたこの機会において、私がかつて接した懐かしい人々、クレタのハチンソン、プラトン、アレクサンドロス、オリンピアのクンツェその他の多くの人々のことを記すことができたのは、私のこのうえない喜びでもある。ここにその人々の幸福を祈りたい。

I 英雄の時代

トロヤ伝説とシュリーマン

ギリシアの発掘物語の最初に登場する人物は、発掘史上、最も華やか
シュリーマンとホメロス で、最も強烈な存在、少しばかり単純すぎる個性の持ち主であるハイン
リヒ・シュリーマンである。この、父親からホメロスの英雄や強大なト
ロヤの話聞いた七歳の貧しい少年の感激と夢が、三十九年後に燦然^{さんぜん}たる黄金となつて実現する物語
は、あまりにも有名である。彼の素朴で少々軽率な断定は、のちに、批判され訂正されるけれども、ギ
リシアの伝説が伝える英雄の時代が実在したことを証明した功績はあまりにも大きい。このことが、
どれだけ後世の人々の伝説時代への関心をあおり、学者たちを刺激したかわからない。彼は、詩人的
幻想によつて書かれたものとみなされていた「英雄の時代」を、現実に甦^{よみがえ}らせたのだ。つづいて彼は
ギリシアの地においても、遠い過去の栄光の時代を、発掘によつて証明するが、それは、もはや美術
品を得るための小規模なものではなく、広い地域全体にわたる大規模な発掘作業であつた。これから



ハインリヒ・シュリーマン

黎明期の考古学の姿そのものでもあったのだ。

あいついでギリシア各地に多くの学者が活躍しはじめ。シュリーマンの古代への熱情と、それを発掘によって甦らせようとする執念とが、なканずく彼の成功とが、狭量で臆病だった学界の眼を開き、熱をふきこんだのだ。

彼の不幸と幸運の変転にもてあそばれた前半生の物語は、自叙伝（『古代への情熱—岩波文庫—）にゆずる。ここでは、夢の実現のために憑かれたひとりの発掘者が、強引に、あるいは迷いながら、進んでいくその足跡をたどろう。それはまた、

伝説のトロヤ

スパルタ王妃ヘレネがトロヤ王子パリスに誘拐されたのが原因で起ったという伝説があるトロヤ戦争は、詩人的想像の産物ではなく、事実であり、トロヤは実在した、という彼の幼時からの確信は、彼のすべての行動を規定するばかりでなく、活動の原動力だった。

まずトロヤがヒッサリツクの丘だと判断したのは、彼のホメロスへの信頼からであるといわれるが、このことは正しい。しかしそれまでもトロヤの問題はとりあげられていた。この背景を述べないでは、シュリーマンの決断はあまりにロマン的すぎるであろう。

一九世紀の初めにヒッサリツクの丘から碑文が発見されて、そこがヘレニズム時代とローマ時代に新イリオンと呼ばれていた場所であることは証明された。しかし多くの学者はホメロスの詩は空想の産物だと考えていたから、この新イリオンにホメロスのトロヤを想定しようとは思わなかった。この